



イエラン・セルシェルが演奏していることでよく知られているボーリントタイプの 11 弦アルトギターを使ってルネサンス期の作品をオリジナル通り（低音のオクターブ移動なしという意味ですが）に弾くにはどうするのか、具体的な事例としてダウランド作品の半音階の進行が美しい **Farewell Fancy** を取り上げ考察します。

11 弦アルトギターでのナット(上駒)の特殊な形状による特殊な事情

まずは、左写真ですが、これは 11 弦アルトギター独特のヘッド部分の写真です。通常のギターのように一本のナットに 1～7 弦までが乗っていて、8～11 弦はヘッド方向に指板が拡張されそれぞれ個別のナットに弦が乗っています。8 弦は 2 フレット、9 弦は 3 フレット、10 弦は 4 フレット、11 弦は 5 フレットヘッド方向に拡張されて弦長が延長されています。いわゆる「開放」というものが 11 弦アルトギターの場合には 5 種類の位置にあると言えます。

11 弦アルトギターの標準的な調弦は通常の 6 弦ギターとの比較を簡単にするため短 3 度下に移高して書くと

弦	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
音程	E	B	G	D	A	E	D	C	B	A	G

になります。

11 弦アルトギターにおいて、8 弦で「C#」を出したいとき 8 弦の開放は「C」ですので 1 フレットを押さえればいいのですが、写真からお解かりのように 8 弦は 2 フレット分ヘッド側に拡張されているため通常の 6 弦ギターの 2 フレットに開放が位置していることになります。したがって 8 弦の 1 フレットを押弦するということは、実は通常感覚で言うなら 1 フレットを押弦するということになるわけです。

Farewell Fancy について

まず、それってどんな曲？って方のために youtube の動画を紹介します。

【1】ポール・オデッセのリュートによる演奏

<http://www.youtube.com/watch?v=yUB2l-fUijU>

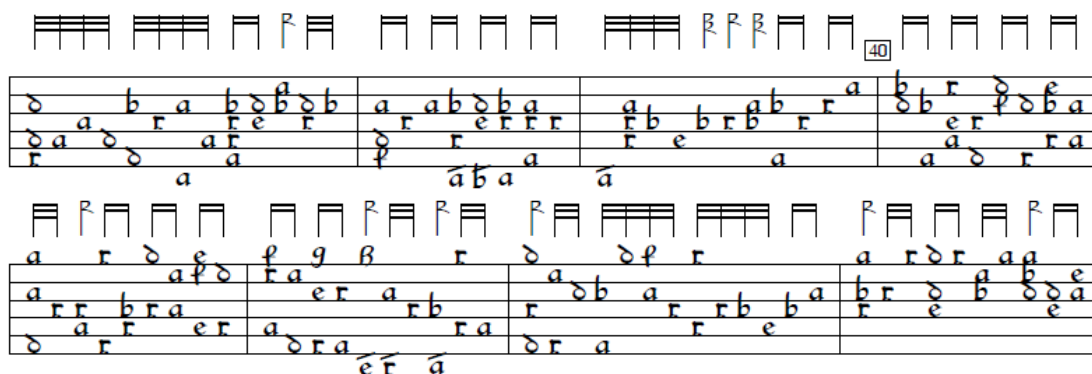
【2】6 弦ギターへの編曲演奏

シュタウファーのコピー楽器での演奏、すごくいい音色の楽器です。ビデオは嫌なノイズが乗っていて聴きづらく残念です。

<http://www.youtube.com/watch?v=kHcDyCbiXiE&feature=related>

いかがでしたか？暗いですか？w でも、美しい曲です。半音階の進行が痛々しいぐらい悲しい気分にしてくれます。僕はこの曲を聴いてすぐ「弾いてみたい！」と思いました。

下にこの曲のオリジナル譜の一部をお見せします。



さて、この譜例はフランス式のタブ譜（タブラチュア）ですが、「こんな TAB 古すぎて読めねーぞ」といわれる方のために簡単に読み方を説明します。

基本は現在使われている数字の TAB とおなじです。上から 1 弦、2 弦の押弦位置をアルファベットで書いてあるだけです。音価（音の長さ）は 32 分や 16 分音符の尻尾だけで示されています。現代の TAB は弦そのものを示す横線があり、その横線の真上に押弦位置のフレット番号を書きますが、古い TAB の横線は弦そのもの示しているのではなく、弦と弦の間にあります。したがって押弦位置を示すアルファベットは横線の上に（線と線の間に）書かれます。

押弦位置をあらわすアルファベットとフレット位置の関係はこの譜例では以下の通り。

アルファベット	a	b	r	δ	e	f	g	β
フレット	0	1	2	3	4	5	6	7

この farewell fancy は 8 コース（8 弦）のルネサンスリュートで弾かれる曲で、7 コースと 8 コースの押弦の指示は TAB の一番下の行に書かれています。普通に使われている（スラッシュなし）のアルファベットは 7 コースで、スラッシュをのっているアルファベットは 8 コースの押弦位置を指示しています。

8 コースルネサンスリュートの調弦は、通常の 6 弦ギターと比較を簡単にするため、またも短 3 度下へ移高して書くと以下の通りです。

コース	1	2	3	4	5	6	7	8
音程	E	B	F#	D	A	E	D	B

余談ですが、ルネサンス物をギターで弾く場合に 3 弦を半音低く調弦しますよね？元のリュートの調弦がこうになっているためです。

さて、譜例の 2 段目の 2 小節目の 3 拍目（真ん中あたり）、1 弦が β（7 フレ）8 弦が e（4 フレ）の部分があります。これをボーリントタイプの 11 弦で弾く場合に先ほどの上駒の形状に原因する特殊な問題が発生します。

調弦を 1-8 弦までルネサンスリュートと同じにすると（3 弦と 8 弦を標準より半音低く調弦する）、問題の 8 コースの 4 フレの音程（D#）は、11 弦ギターでは拡張指板のため 2 フレでない
と出ないことになります。ルネサンスリュートの 8 コースは、11 弦の 9 弦開放とおなじ音程な
ので 9 弦で弾こうとすると、このケースの場合 1 フレットを押弦することになります。同様に D
に調弦された 7 弦でも 1 フレになります。2 フレ・7 フレの押弦は、いくら 11 弦はアルトギター
だからといってもやはりきつく、このケースでは内声が空っぽだとすればなんとか押さえられま
すが、特例でしょう。

11 弦アルトギターの 8~11 弦は一種の特殊変調弦と理解すればコードフォームがオリジナル
からは相当異なるフォームになることも理解しやすいです。しかしこれは「オリジナル通りに弾
く」目的で演奏する際に実際的には非常に障害・演奏不可能になると想定されます。

「オリジナル通り」にまずはこだわるのは、リュートとギターが奏法上似た楽器であるとか、
ボーリンの 11 弦はルネサンス曲をオリジナル通りに演奏するために開発されたからが理由では
ありません。ダウランド作品はたいていの曲がそうであるように多声音楽（ポリフォニー）であ
るからです。安易に押さえにくい音だけをオクターブ操作してしまうと横の流れがめっちゃくちゃ
になってしまいます（オクターブ操作は、オクターブ復弦を有するリュートの低音部よりも、す
べてが単弦のギターのほうがのダメージが大きいです）。オクターブ操作するときは周りの音も
同様にし、できるだけ自然な形にしてあげる必要があると思いますが、比較的狭い音域にあれだ
けのポリフォニーを詰め込んだダウランド作品ではまたそれも難しいのではないかと思います
（声部が交錯しやすいという意味で）。

11 弦アルトギターの 7~11 弦の変調弦の可能性を考える

そこで問題は Farewell Fancy に合わせた調弦で解決できるのか考察してみます。
まずは、また別の 11 弦のナット（上駒）に起因する特殊なテンションの問題について考えます。
下の表 1 に 11 弦アルトギターの短 3 度下に移高したダイアグラムを示します。

【表1】11弦アルトギターのナット周りの構造と調弦

		フレット					
		-5	-4	-3	-2	-1	0
弦	1						e
	2						b
	3						f#
	4						d
	5						a
	6						e
	7						d
	8				c	c#	d
	9			b	c	c#	d
	10		a	a#	b	c	c#
	11	e	e#	a	a#	b	c

表の見方ですが、横方向にフレット、縦方向に弦を取り表にし、それぞれのセル（升目）には

音程を記入してあります。灰色のセルは押弦できない部分を示しています。フレットの「マイナス」は「拡張指板」上のフレット番号です。「0」は通常の意味（位置）での「開放」を表しています。

11 弦アルトギターの 6～11 弦に使う弦は通常のギターに使う 6 弦です。同じ 6 弦を使いより低い音を出すために音が低くなるほど指板を長く＝弦長を長くしています。

目的の音程を得るために弦長だけで実現しているわけではありません。低音に向かうほど弦のテンションも落として実現しています。表 1 をよく見ていただくと、6・7 弦間は音程が E・D の長 2 度、つまり 2 フレット分違うのに、弦長は同じです。ということは、7 弦は 6 弦に比べ 1 音分の弦のテンションが緩いです。同じように、9・10 弦間（B・A）、10・11 弦間（A・G）でテンションが半音分ずつ低くなっています。

この弦長と緩いテンションのおかげで 11 弦アルトギターのあの独特の音色の低音がでるんです。（6 弦でも、またリュート系の古楽器でもフレットをファンアウトして低音弦側の弦長を稼いで低音の響きを改善したりしますよね？←テンションは強くなるけど）

表の「0」フレットの部分をタテに見ていただいても、下に行くほど音程が下がっていますよね？同じフレット位置では弦が違っても同じ弦長ですし、11 弦ギターの場合は同じゲージの弦を 6・11 弦に張るので、音程が違うということは弦のテンションが違っているということになります。

じゃあ、「0 フレット」で 6・11 弦をすべて E にチューニングしたときに、それぞれの開放はどんな音程になるのか？と思って作成したのが下の表 2 です。

【表2】テンションを6弦に合わせて補正した場合

		フレット					
		-5	-4	-3	-2	-1	0
弦	6						e
	7						e
	8				d	d#	e
	9			c#	d	d#	e
	10		c	c#	d	d#	e
	11	b	c	c#	d	d#	e

この様にテンションをあわせると 6 弦から 11 弦に向かって開放の音程は e・e・d・c#・c・b となります。

さて、変調弦の可能性を探る前にもう一つ、各弦開放の可能な音程の範囲を割り出して見ます。ご存知のように、ギターは弦のテンションを上げると音程があがりますが、テンションをあげすぎると切れてしまいます。逆にテンションを下げると音程は下がりますが、下げすぎると音が鳴らなくなります。音として演奏に使えるテンションには上記からわかるようにある程度の幅があ

ります。

ナイロン弦の 6 弦の場合、開放で短 3 度上の G までは巻き上げて切れないです。下げるのは長 3 度下の C までは比較的使われます。ここではさらに半音下げて B まで使えると考えます。

この範囲で各弦の音程を示したのが表 3 と 4 です。

【表3】最高テンションにした場合

		フレット					
		-5	-4	-3	-2	-1	0
弦	6						e
	7						e
	8				f	f#	e
	9			e	f	f#	e
	10		d#	e	f	f#	e
	11	d	d#	e	f	f#	e

【表4】最低テンションにした場合

		フレット					
		-5	-4	-3	-2	-1	0
弦	6						b
	7						b
	8				a	a#	b
	9			e#	a	a#	b
	10		e	e#	a	a#	b
	11	f#	e	e#	a	a#	b

弦別にまとめると下の表になります。

	最低音程	最高音程
7 弦	B	G
8 弦	A	F
9 弦	G#	E
10 弦	G	D#
11 弦	F#	D

Farewell Fancy を 11 弦アルトギターで演奏するための調弦案

さて、いよいよ Farewell Fancy を 11 弦アルトギターで弾くための調弦のお話に移ります。7 弦は標準調弦のまま D に調弦します。7 弦は 1-6 弦と共通のナットなので、これは特殊な問題は発生しません。タブラチュアどおりに演奏できます。

問題はルネサンスリュートの B に調弦される 8 コースで演奏される音程です。11 弦アルトギターの 8 弦以下は拡張指板のため特殊問題が起こるのでした。タブラチュアのままでの演奏は一般的には非常に困難です。Farewell Fancy の楽譜を最初から最後までみて 8 コースの押弦位置を調べました。使われるのは、0,1,2,4 の 4 種類でした。11 弦アルトギターでは 7 弦まですでに用途が決まっていますから、残りの弦は 4 本。一本ずつ 0,1,2,4 フレに対応する音程に調弦出来れば弾けそうです。なお、8 コースの 3 フレが使われないのは 7 コース開放と同じ音程になるためです。また 4 フレが使われるのは先ほどの譜例の例の場所ですが、メロディが高いところに行くために、押さえやすい D#を得るためです。

0,1,2,4 のそれぞれの音程は、B,C,C#,D#となります。この各音程を先の弦別にまとめた開放音程の範囲に入るように各弦に振り分ければいわけです。今回のケースでは 11 弦 B、10 弦 C、9 弦 C#、8 弦 D#に割り振ると開放音程の範囲に入ります。

E-B-F#-D-A-E-D-D#-C#-C-B 調弦のテンションを調べる

11 弦アルトギターの調弦が決まったので、各弦のテンションを調べます。
それぞれの開放音程から 0 フレットでの音程を比較することによりテンションの強弱を求めると下の表になりました。

	11 弦での調弦	開放位置	0 フレットでの音程
6 弦	E	0	E
7 弦	D	0	D
8 弦	D#	-2	F
9 弦	C#	-3	E
10 弦	C	-4	E
11 弦	B	-5	E

表から 7 弦の 0 フレット音程が最も低いことからテンションが最も緩いことがわかります。
また 8 弦の 0 フレット音程が最も高いことからテンションが最もきついことがわかります。
テンションは各弦で一定か、徐々に変化するのがいいのですが、結果はガタガタのテンション構成となりました。

実は～

実は Farewell Fancy での 7 コースの使われ方を調べると、押弦として 0,1 フレの 2 種類しかありません。案としてはリュートの 7 コースを 11 弦ギターの 8-11 弦に割り振り、8 コースを 7 弦でとることも考えられます。使用頻度と使用範囲の広い 8 コースを 7 弦に割り振るのは演奏が楽になるメリットがあります。ただしこの場合 7 弦を B まで下げ、8 弦 D#、9 弦 D に調弦するため 0 フレット音程は 7 弦からそれぞれ B,F,F となり、先の例でのテンション差 D-F よりもかなり大きくなってしまいます。

結論 - Farewell Fancy の 11 弦調弦は e-b-f#-d-a-e-d#-d-c#-c-b

Farewell Fancy では、7 コースの使用は 0,1 フレット、8 コースの使用が 0,1,2,4 フレットでした。8 コースの 4 フレットと 7 コースの 1 フレットの音程はどちらも D# です。ということは、D# に調弦する 8 弦で 7 コースの押弦から開放されるということになりますので、必ずしも 7 コースを 7 弦に割り当てる必要がないことになります。結局 Farewell Fancy では「番外弦」(7-8 コースのこと)で必要な音程は、重複をなくせば、B,C,C#,D,D# の 5 種類であり、11 弦アルトギターでは 5 本の「番外弦」がありますので、すべてを開放で取ることが可能になります。

ということで最終的な調弦とテンションは下の表になります。

	11 弦での調弦	開放位置	0 フレットでの音程
6 弦	E	0	E
7 弦	D#	0	D#

8 弦	D	-2	E
9 弦	C#	-3	E
10 弦	C	-4	E
11 弦	B	-5	E

テンションを推定する0フレットでの音程は7弦のみD#、他がすべてEになりました。6～11弦の開放の音程も半音間隔となって、きれいな関係になりました。

今回はディアトニックに調弦される7-11弦で問題が発生するようにクロマティックな曲を「わざと」選びました。バッハのように声部にに関わりなく徹底的なポリフォニー・模倣のある曲ではなかったですが・・。8コース以上のリュート曲を演奏するときに拡張指板に起因する特殊な問題が存在することは、実は11弦ギターを買う前に気づかなかった問題でしたので今回詳しく書いて公開することにしました(まあ、11弦を買ったのでルネサンス曲をオリジナルに近い形で弾こうと思いダウランドのリュート用楽譜を集めたのです。それではじめて8コースまで押弦するってことを知ったものですから・・)。「11弦アルトギターはルネサンスリュート作品をオリジナル通りに弾くために開発された」とはよく聞く話ですが、今回の例のようにいつも「そのまま」弾けるわけではなかったのです(たいていは大丈夫です)。

ルネサンスリュート曲をオリジナル通り「そのまま」弾くには、むしろイエペスの10弦ギターにハナバッハの10弦用の弦を張ってルネサンスリュート調弦にし、実音での音高を合わせるのであればシャブのカポ2本使って(またはカポを特注し)3カポ(または5カポ)した方がより汎用性があると思います。調弦・運指を考える必要がないので。

だんだんと11弦の弱点も増えてきた今日この頃であります。とはいっても、11弦好きです^^。一番すきなのは拡張指板が使われる低音の音色^^。厄介なところにはまってしまいましたw

今後ダウランドのソロ曲を11弦ギターで弾くためのチューニングのリストを作ってみようかなと考えてます。次の課題として。

長文お疲れ様でした。